父を語る

―エッセンの息子として―

三中38回　小針敏伯

エッセンの由来

一九二九年（昭和四年）生まれの私は、生まれたときから七十七の今まで、三中の同窓会では「エッセンの息子」です。

父小針徳治は一九二二年（大正十一年）に、当時の「京都府立京都第三中学校」藤森校長に数学担当教諭としてスカウトされて、島根県立島根第一中学校から赴任してきたと聞いています。島根一中時代、その前の富田林中学で数学教諭として勤務した時代から、その「あだ名」は「エッセン」だったそうです。一九四五年～六年に宇治高女の校長になって数学の授業をしなくなるまで、「エッセン」の「あだ名」からは逃れられなかったのです。

父はこの「あだ名」を、それがドイツ語で「食事」であるこ

とから「数学は学問の食事だ」となって、むしろ胸を張って「エッセン」連発していたのではないかと思います。

東北（福島）育ちの父は、教壇上で身体に似合わない大声で、代数の授業では「A＋B」と書いて、「イー＋ビー」と読み上げ授業し、幾何では「一線上の点E」を板書して「エッセン上の点イー」と読み上げて説明しました。自分では「エー＋ビー」と発音し、「イッセン上の点イー」と発音しているのですが、東北以外では「イー＋ビー」・「エッセント上の点イー」としか聞こえなかったのです。

小学校から中学校に入学したやんちゃ盛りの男の子には、「エッセント上の点イー」は強烈な印象を与えたのでしょう。所変われど「あだ名」変わらずでした。

家庭での会話では、イとエはかなりよく区別して発音できるのですが、教壇上で多くの生徒に聞かせようと大声になると、イとエとが逆転してしまうのは東北弁で育った宿命だったのかも知れません。

余談ですが、敗戦後府立の学校の教職を追われ、公職追放令から解除されて私立の東山高校の教頭に復職したときの「あだ名」は「豆タン」（豆タンク＝小型戦車の略称）だったそうです。体型と行動からはこの方が適切に父を表現していると思います。が、矢張り「エッセンの息子」と呼んでいただく方が父の業績

を記憶していただいていると、誇らしく思う私です。

家庭での父

六人の子福者（当時は当たり前）の父の、第五子で長男の私は、父にとっては待ちかねた「男の子」で、生まれたときの喜びは姉達の僻みを呼んだらしく、今でも姉たちとの話題になりますが、私にとっては些か荷の重い愛情でした。

私の記憶の最初は、父の胡座の中に抱かれて煮魚の骨を取って呉れ、タバコと晩酌の入り交じった体臭を嗅ぎながらの夕食です。

小学校に入学するまでは、父の宿直の夕飯を、弟と一緒に母に手を引かれて三中の宿直室まで持って行って、小使いの小父さんにお茶を入れて貰いながら四人で頂いた記憶も鮮明に覚えています。

母も、独身時代は小学校の訓導をしていたそうで、当時としては珍しい教育パパ・ママでした。姉たちみんなが女子としては最高の教育を受けさせるために、葛野郡の太秦安井村住まいに拘わらず、京都市内の高等女学校に入れるために三年生から京都市内のレベルの高い小学校に転校させられ、私も二年生から京都師範学校附属小学校に転校させられ、訳も判らないまま片道

一時間以上の徒歩と電車の乗り継ぎで通学させられました。その為に私の直ぐ上の姉は、五年生で附属小学校に一番近い室町小学校に転校させられて私の登校時の保護者役をさせられて苦労したそうです。八十才になった今でもその時の不満を私にこぼしますので、その姉には未だに頭が上がりません。登校は姉がいてくれたので不安はなかったのですが、下校時には、背丈の低い私は電車で座れないときは、窓からは空しか見えず（座席に座れたときは膝立で窓に向いてかろうじて家並みが見えました）車掌さんの案内を頼りに乗り換えや下車をしていました。

学校から帰ってきても、疲労で近所の子ども達と遊びに出る元気がなく、姉たちが帰ってくると直ぐ勉強をはじめるのに連られて机に向かい、夕食後は、父が毎夜自宅でしていた塾（三中の生徒さんの受験のための数学塾）に列席させられて算術（当時はこう云いましたが、今で云う公文の自習）をさされて、その席で眠りこけることがしばしばでした。

それでも、日曜日には「御室」や「嵐山」に、母の作ってくれたお握りと麦茶の入った水筒を持っての、今流に云えばハイキング、当時の言葉では山歩きや川遊びに、氏神のお祭りや月例の夜店に、弟と二人を連れ出してくれました。毎年夏休みには一家総出で、若狭海岸の民家の離れを借り切って、一週間ほどの海水浴に連れて呉れ、冬休み元旦の式典から帰宅後直ぐに、

夜行列車に乗り継いで、福島の生まれ故郷まで弟と二人を連れてくれた、等々、楽しい思い出は尽きないほど有ります。

三中の教頭とエッセンの息子

1，教頭の息子の入学

昭和十七年の小学校から中学校への進学期に、私は大人の嫌な面を初めて知りました。

当時は公立中学への進学は居住地による区域制で、私の住所は三中の区域でした。三中の当時の三高(旧制の京大予備校?)への進学率はかなり高く、従ってその受験競争はかなり激しいものだったと聞いていましたが、選抜は内申書と面接・体育実技だけで、附属小学校卒業生男子は全員三中区域居住者が三中に願書を出せば当然入学できると思っていました。私は小柄で体力は有りませんが、器用で鉄棒や跳び箱・徒手体操は得意でしたので、投擲と徒歩競争は最低でしたが体育実技もさして気にせず、試験当日、面接と体育実技を機嫌良く受けて帰り、息子が受験生である教員として受験関係事務から外されている父も、面接担当・体育実技担当試験官の先生から私の受験結果を聞いて「今日はよくやったようだな」と機嫌良く帰ってきました。

ところが翌日、父不在の合否判定会議で、「今年は競争率が特に激しいから、内申書を重視するように。国立の附属小学校からの受験生でも全員合格とすることは問題が有る。」との指示が出ているとのことで、附属小学校の内申書を調べたところ私の内申書が付属からの受験生中最低に位置づけられていたそうです。そこで、合否判定会議が混乱しかけたけれど藤森校長の決断でこの指示を無視することとして私を合格判定にし、付属からの受験者全員を合格させたそうです。

が、そのいきさつを聞いた父は面目を潰されて不機嫌極まりない顔で帰宅しました。自慢ではありませんが、私の小学校の成績表は三年生以降は図画と習字・音楽以外全科目「甲」でしたから、内申書が同期の受験生の中で最低に位置づけられることはないと父も信じ私もそう信じていました。父が腹立ち紛れに不用意に私と母に合否判定会議の混乱の中で出た憶測（内申書の記述者が、「指示に拘わらず三中へ内申提出者全員を合格させるために、教頭の息子の内申を最低に位置づけた」と言う憶測）を話し、私に「付属から入学したどの生徒にも負けるな。I先生（六年男子組担任）を見返してやれ！」と厳命しました。

以来私は、それまで信頼し尊敬もしていたI先生が信じられなくなると同時に、三中に入学できたことを素直に喜べず、がむしゃらに勉強して、一・二年生の学年末成績席次では

三百五十人中十位以内に入り（三年からは学徒動員で学年末成績席次の公開発表が無くなりました。）父の期待に添えたものと思っています。

2，教頭とその息子の学園生活

当時の学生は、街で上級生や先生や配属将校（軍隊消滅後の学生には〝配属将校〟なんて言葉は判らないでしょうが、戦争中の中学校以上には軍隊から将校が派遣され〝軍事教練〟という戦争の訓練が教科として組み込まれていました。この配属将校は、先生と違って軍人ですから校長や教頭の指揮命令には無関係に生徒を支配し、生徒がその命令に従わない場合は軍隊式の激しい懲罰を加えました。職員会議でも配属将校の意に逆らう先生には〝徴兵〟という罰を加えると言う噂があったほど恐ろしい存在で、戦後の父の思い出話で、これの横暴を抑えて先生と生徒を守るのが、藤森さんと父の最大の苦労だった話しをよく聞かされました。）に出会うと相手より先に軍隊式の敬礼をすることが義務付けられて、それを怠ると上級生や配属将校からはビンタを喰らい、先生からはお小言を云われたものでした。

私の自宅は、学校から徒歩約十五分位で、父の通学路は、途次数学のO先生の自宅前を通りました。私は「大人になった証

として」一人で登校したかったのですが、父は三中生という立派な息子を自慢したかったのか、上級生や配属将校からのリンチから息子を守りたかったのか、一人での登校を許しませんでした。多分後者だろうと思います（私はリンチを受けたことがありませんでした。）が、私は前者と考えて、前方を一生懸命見つめて上級生や配属将校の姿を探し、彼らが父に敬礼する前に私が敬礼するように努めたものでした。特にO先生の自宅の前を通り過ぎてからその玄関の引き戸の開く音が聞こえたとき、私は立ち止まって先生が出ていらっしゃるのを待って敬礼をしてから、先生の後ろを歩くほど気を遣いました。

十三才の少年の私がこんな気を遣ったことを未だに鮮明に覚えているのは、矢張り父に掌中の玉と育てられた、幼児の育児環境の結果か、時代の背景なのでしょうか？

3，教頭とその息子の学徒動員生活

私が三年生の七月、戦況が急迫したためか中学三年生以上を軍需工場で働かすことになり、京都府へは愛知県半田市の中島航空機工場に派遣の割り当てがあり、京都府ではこれを三中に割り当ててきました。数ある中学校の中で何故三中に割り当てたのか？三中の藤森校長が黙ってこれを了承したのかは疑問の多いところですが、後年私が地方行政職と付き合い彼らの思考

傾向から勘案しますと、教頭の息子のいる中学に有利な割り当ては出来ず、一番不利な割り当てを強制しても、校長が反駁が出来ないと読んだ結果ではないかと邪推しています。

何はともあれ、ある夜帰宅した父が、深刻な顔をして母と私を呼び、「明日全校に発表するが、学徒動員で敏伯は愛知県の半田市と言うところに行くことになった。準備をするように。」と告げ、直ぐにまた学校に戻り、当分帰ってきませんでした。その後、半田の宿舎について十五畳の部屋に十四人が詰め込まれ、高粱入りの赤飯まがいの夕食に激しい幻滅を感じるまでは、父母と教頭の息子の束縛を離れ、一人の独立した男の子としての生活を想定して少し昂揚した気分でいましたが、そこでの生活が始まったとたんに父母恋し・母のご飯が恋しい十五才の頑是無い男の子に変わりました。しかも、宿舎の教官室に担任教官が常時詰めていて、教頭の息子からは解放されることは無く、多くの級友がする空腹と、監視下での強制労働逃れの、天真爛漫な悪業には誘われず・加わらず、善良真面目で、自他共に面白くない生徒でした。深夜の空襲警報で避難した畑の畦の間で闇に紛れて、空腹に耐えかねての薩摩芋の盗掘とその場での生齧りが唯一の悪業であったことを、今ここで約六十年ぶりに告白します。

東南海の地震の第一報が学校に届いたとき、父は家に駆けて

帰り「敏伯も死んだかも知れない」とだけ母に告げて、有り金総てを抱えて花園駅から汽車に飛び乗ったそうです。半田で私の顔を見て一瞬顔をほころばせましたが、後は話しもせずに死亡した上級生八人の措置に忙殺されて、そのまま京都に帰ってしまいました。母は父が帰って小使いさんに頼んだ伝言を聞くまで、生きた心地がしなくて、仏壇の前でお経を唱えていたそうです。

父は教頭として、二月か三月に一度、一泊程度半田を訪れましたが、私と二人でゆっくり話す機会もなく、たまたま帰京の日と、私の公休日が重なった二回だけ、名古屋まで同道して、映画を見せてくれました。名古屋までの車中の会話や、どんな映画だったか覚えていませんが、父の生涯で私を映画館に連れてくれたのがこの二回だけだったので、あの暗闇の中で手を握って映画を見せてくれた父の心は、思うに余りがあります。その帰り、名古屋駅裏の闇市で餌（食料）を背負えるだけ買って持たしてくれたのも、せめてもの親心。これが最後の別れになるかも知れないと思っていたのではないかと思います。

三中卒業後の父

二十年八月。動員先の半田から、何日帰郷し、何日三中に登

校したか記憶にありません。

初めて登校したときに藤森校長と父が学校で迎えてくれたか、川瀬校長に代わって教頭が何処かに変わっていたかの記憶も定かでありません。

記憶にある父は、そのころ急遽、宇治市の女学校の校長に転勤させられ、英語が使えない為に三中の英語のM先生の同道をお願いして新しい仕事に赴任したのに、校長職が上手く務められないためか、毎夜遅く不機嫌な顔で帰宅してくる、私の見たことのない憔悴した父でした。私が、戦後のアメリカの占領政策の一環として「教職追放令」が出されているのを知ったのは遥か後年ですが、父がそれに該当するかしないかの審査が行われていた時期なのでしょう。

その審査の結果、父は教職を追放され、新任校長は半年も続けることが出来ず、五十三才で突然教職を追われ、浪々の身となりました。

捨てる神が有れば救う神もあるのか、それを伝え聞いた三中の卒業生の親御さんが、私共の住まいの近くに一反ほどの荒れ地を無償で貸してくださいましたので、そこで俄百姓を始め、一家総出で野菜や芋類を栽培し配給食料の足しにしましたし、三中時代の実績を買ってくださる親御さんから子息の数学指導を依頼されて、自宅で暮夜密かに六人ほどの家庭教師をして、

僅かな現金収入を稼いでくれましたが、主として家財の売り食いで自分達夫婦の生活を維持しました。私も含め就学中の三人の子どもの生活費と学費は、奨学金と各自のアルバイト収入に頼るという状態になり、父の一生を通じて最悪の生活が四～五年続きました。

教職追放令から開放されたのが何時だったかも記憶にはありませんが、追放解除の通知の翌日、これも三中時代の生徒の父兄の推薦で、私立の東山高校（学制改革で旧制の東山中学）の教務主任（教頭?）に職を得ることが出来、「水を得た魚」のように元気な父が見られるようになりました。

父が東山高校の二年目か三年目かの夏の高校野球で、東山高校の野球部が京都地区の準決勝に進出し敗退した日の夕食で「残念だけれど、優勝して甲子園まで行ったらいくらお金を都合しなければ判らないし、その算段が出来そうにないので助かった。」と胸を撫で下ろしながら、京都地区で東山高校の声価が上がったことを嬉しそうに語ったのが、教員として過ごした父の最後の誇らしい顔でした。

勿論、東山高校の数学の出来の悪い生徒の課外指導として、私宅の夜の数学塾を再開しましたが、私はもう社会人として働いていましたからお呼びではありませんでした。が父の出来の悪い生徒への指導法を隣室から聴き覚え、後々の社会生活に役

立てられたのは有難い勉強でした。

父の晩年と息子

父の失業時代に三中（まだ学制は旧制で府立三中でした）の卒業を迎えた私は、家計を考え、即就職を希望しましたが父母は高等教育の必要性を諄々と説きました。話し合いの結果、三年制で奨学金完備・就学率最高の国立京都工芸専門学校（現在の京都工芸繊維大学。）を受験することとし、大層な受験勉強もせず電気科に入学し、奨学金と家庭教師のアルバイトで三年で無事卒業し、数学・理科の教員免許と第二種電気主任技術者の国家資格を得ました。

就職に当たって、父は高校の教員を主張し、縁故を辿って高校を斡旋してくれましたが、姉達が全部教員になり家族みんなが先生臭に染まっている（高専在学中に夕暮れの路上で見知らぬ小学生から「先生さようなら」と声をかけられて驚いたことがありました。）ことに辟易していましたのでこれに逆らい、斡旋を謝絶し、電気通信省からの出講講師から声をかけられて地方採用の国家公務員として電気通信省に入省しました。

思えば、父に対する息子の最初で最後の、そして最大の反抗でしたが、許すも許さないも無い、息子の巣立ちでした。それ

でも、母が何処で手に入れたか知りませんが、一合の酒と鰑を神棚に供えて、そのお下がりを父母と三人で祝ってくれた記憶も鮮明です。

ところが、この息子の巣立ちは、体力の限界を心得ない巣立ちでした。

入省した途端（試用期間中）に、地方採用と本社採用の大きな待遇差を見せつけられて、「では俺も」と本社採用にされるため受験資格を獲得しようと、その年新設の新制立命大学理工学部の夜間部三回生募集に応募して合格し、一年半後には受験資格を獲得し、採用試験に合格して本社採用されるためのガリ勉を始めましが、これが身の破滅！！

虚弱体質に無理が重なり、二十六年十月の受験直後に腎結核を発症し、合格通知は入院中の病室へ、本社採用・出頭通知の電報は患部摘出手術の翌日に病室へ母が持ってきてくれましたが、到底出頭不能で採用は取り消しになってしまいました。（余談ですが、大学は要卒単位を修得していましたので、学校からの通知で学費を送金して卒業証書と学士証は送付して貰い、後年社会人入学したときの修得単位認定に役立ちました。）

入院中父は、務め帰りに週二回は病院に立ち寄り、「運命と諦めろ。生き残って首が繋がっているだけでも幸と思え。」と慰めながら、あの物のない時代に鶏卵や牛乳、カステラやチョ

コレート・時には生け花まで差し入れしてくれました。その金額よりも、そんな買い物に目もくれなかった父がそれを捜し出してくれた想いに感謝しながら、己の運命を呪う毎日でした。入院中、父母姉弟達は、三日に空けず、特に東京に嫁いだ姉たちも再三、見舞いに来てくれましたが、我が身への悔が忘れられない間は微熱が続きました。しかし心と体の繋がりは不思議なもので、「時間薬」の諦めが心の立ち直りを促し、再起への意欲が湧き始めるとともに微熱もなくなり、退院自宅療養の許可が出たのは約一年後の年の暮れでした。

翌年の正月三日、父の還暦祝いと私の退院祝いを兼ねて東京の姉たちも帰省して呉れた、一家揃っての夕食で、僅かの酒で父が酔っぱらい、昔三中の数学教科主任をしていた頃、お正月に恒例となっていた、学校での祝典の帰り数学担当の先生方を引き連れた我が家での新年会で歌っていた演歌を唱ったのが、父の歌の聞き納めでした。

その三日後の夜中、父の呻きと母の叫びで目を覚まし、父が全身の麻痺と意味のある言葉が喋れなくなっているのを知り、取りあえず近所で開業なさっている三中の校医のお医者さんに往診をお願いしましたが、「中風（今で云う脳梗塞）で、手当のしようがない。大切に見守り、なるべく声をかけ、早く手足が動くように按摩さんに掛かって動かすように。」とのことで

した。来るべき時が来たと言う想いと、私の長患いが父の心身の老化を早めたのではないかという自責の念との交錯した中で、自宅療養をよいことに母と二人で介助に努めましたが、父自身も再起を諦めていた（父の家系は殆どが中風で倒れてそのまま死んだそうです。）のか、リハビリの努力は殆どせず、寝た切りで徐々に体力が衰え、その限界がきたのか三年目の大寒に肺炎を発症し、お世話になった三中の校医さんに脈を取られながら、片方の手で母と私の手に触れながら静かに息を引き取りました。

この時お医者さんが「四十年も付き合って、三中であんなによい仕事をし、私より若いのに。」と言いながら涙を流してくださったこと、翌朝納棺前に前夜剃ってやった髭が伸びていてもう一度剃ってやりながら死を疑ったこと、旅路の衣替えに遺体の背中に手を入れてほのかな体温がまだ残っていた時に思わず涙を流したことは、先日五十回忌の法要をして和尚さんのお経のコーラスを聴きながら、私の胸の中に昨日のように浮かび上がりました。